

國學院大學學術情報リポジトリ

國學院大學図書館所蔵『俵藤太物語』の解題と翻刻

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-07-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 針本, 正行, 太田, 敦子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000669

國學院大學図書館所蔵『俵藤太物語』の解題と翻刻

針本 正行
太田 敦子

はじめに

國學院大學図書館に、『俵藤太物語』（三卷）が収蔵されている。『俵藤太物語』の諸本については、すでに先学の研究成果⁽¹⁾において、古本系として、室町時代に制作された金戒光明寺蔵『俵藤太草子』⁽²⁾、流布本系として、アイルランド国ダブリン市のチェスター・ビーティー・ライブラリー（CBI）蔵『俵藤太物語』⁽³⁾・学習院大学日本語日本文学科学研究室蔵『俵藤太物語』⁽⁴⁾・寛永頃刊絵入本『俵藤太物語』⁽⁵⁾・栃木県立博物館蔵『たはら藤太絵まき物』及び「たはらとうた」⁽⁶⁾などがあると指摘されている⁽⁷⁾。

そこで、本論では、國學院大學図書館所蔵『俵藤太物語』（「國大本」）の全文翻刻、挿絵の構図の分析をふまえて、「國大本」と流布本系本文との相違、古本系と思量される「國大本」と「金戒本」との本文の相違、「國大本」の巻末表現に見る古本系『俵藤太物語』の文学的趣向などの問題についての検証を通して、國學院大學図書館所蔵『俵藤太

物語』の特徴を明らかにしたい。

なお、國學院大學図書館所蔵『俵藤太物語』の翻刻にあたっては太田敦子氏の協力を得た。

【書誌】

全三巻。絹本仕立て。寸法は、縦三十三糎、長さ、上巻は一三六四糎、中巻は一三八一糎、下巻は九九七糎。挿絵は、上巻に六図、中巻に六図、下巻に四図。題簽は、上巻（「たはら藤太物語 中」と錯誤による貼付）、中巻（「たはら藤太物語 上」と錯誤による貼付）、下巻（「たはら藤太物語 下」とある）。

一、國學院大學図書館所蔵『俵藤太物語』の本文

國學院大學図書館所蔵『俵藤太物語』の本文の特徴について、「國大本」と流布本系の本文の相違、「國大本」と「金戒本」の本文との相違の分析を通して確認したい。

（一）國學院大學図書館所蔵『俵藤太物語』の本文と流布本系本文との相違

本國學院大學図書館所蔵『俵藤太物語』と流布本系の本文の相違について、それぞれの、上巻冒頭の本文と下巻末尾の本文とをあげて、確認したい。

1 上巻冒頭の本文

① 國學院大學図書館所蔵『俵藤太物語』上巻冒頭の本文

それ人王六十一代の帝朱雀院の御宇にあたり承平二壬辰歲神無月廿日あまりの事なるに江州勢多の橋におほい

なる大蛇はひかゝり侍りければ往来の貴賤きも魂をうしなひたやすく橋を過るものなかりければ万民の愁をなし只橋のかなたこなたに立煩はうせんとしてそ居たりけるこゝに藤原秀郷といふものありけるか此由を聞てやすからぬ事なりとて身をやつし旅人の姿に出立てあみ笠といふものを着しつゝ、弓箭はかりを持只一人橋のかたへ来りつゝ、此ありさまを見て少もは、からす大蛇の背の上をあらゝかにふみてしつかにそ通りける

(中略)

かくて其後いつくともしらす白髪なる老翁一人出来り秀郷にむかひていわく我は是此勢多の橋の下に往事すてに二千餘歳なり我おほくの貴賤をはかりみるに御邊ほかうなる人あるまし我にとしころ地をあらそふ敵ありて合戦度々に及といへとも身ふせうにして終にその本意をとけす鬼界高麗或震旦國までも身を化して相頼むへき人を尋けれども汝のことくなる無双武藝の武士いまたみすねかわくは我にたのまれて彼かたきを伐てたへかし

②流布本系（学習院大学日本語日本文学科学研究室蔵『依藤太物語』上巻冒頭の本文）

朱雀院の御時に、田原藤太秀郷と申て、名だかき勇士侍り。この人は昔、大織冠鎌足の大臣の御すゑ、河辺の左大臣魚名公より五代の孫、従五位の上村雄朝臣の嫡男なり。村雄朝臣、田原の里に住しけり。しかるに秀郷、十四歳の時なりしかば、初冠せさせて、その名を田原藤太とぞ呼ばれけり。若輩のころより朝家に召され、宮仕へし侍事、とし久し。

(中略)

さるほどに、秀郷辞退するにをよばねば、ゐたる所をつゐ立て、門外に出て見てあれば、はたちあまりの女性、たゞ一人たゞずみゐたり。(略)かの女房、藤太がそばにさし寄り、小聲に申やう、「まことに、わらはを見知り給はぬこそことほりなれ。我は是世の常の人にあらず。今日しも勢田の唐橋にて、まみえ申せし大蛇の変化した

る女也」とぞ申ける。

「國大本」は、上巻冒頭で「藤原秀郷」の物語を志向し、大蛇の化身を「老翁」とする。一方、流布本系は、「田原」を本貫とする「田原藤太」の物語として始発し、大蛇の化身を「女」とする。それぞれ、化身した本体を名乗ることにより、「翁語り」の物語、「龍神・龍女」の物語として展開することとなる。

2 下巻末尾の本文

① 國學院大學図書館所蔵『俵藤太物語』下巻末尾の本文

かくて副將軍宇治民部忠文は終に勸賞蒙らざりけれども九條殿御詞を畏内裏を罷出けるか大地も響大山もくつる、計の音聲を以て口惜事なり同勅命を蒙て同朝敵を亡かし一人は賞にあつかり一人は恩にもる、小野宮殿の御はからひ生々世々不可忘家門をなかくうしなはんと旬り左右の手をにきり給へは八の爪手の中に通り血なかれ出ければ各肝魂をけし給ひけるか宿所に帰り一夜かうちに白鬚となりて終日食事をとめ終にうせにき悪霊となりさま／＼おそろしき事とも多かりけり則神にいわ、れ給ひて宇治におはします離宮明神これなりいかなる事にや祭の日はわらわへのおほくあつまり待るとそこれより小野宮殿の子孫絶はて、九條殿は一言の情に依て摂政関白今にたえさせ給はず

② 流布本系（学習院大学日本語日本文学科学研究室蔵『俵藤太物語』下巻末尾の本文

そも／＼俵藤太秀郷の、将門をうち滅ぼし、東国に威勢をほどこし給ふ事、ひとへに竜神擁護し給ふなるべし。それをいかにと申に、竜神は女人に変化し給ふなれば、かの小宰相の御局、又時雨と申女房、いさしら雲のよそにして、秀郷大切にいとをしみ、大事を語り聞かせて、高名をきはめさせし事、よく／＼思へば、かの女の心に、竜神入代り給ふか。おぼつかなし。其うへ、三井寺の御本尊弥勒菩薩埵の御めぐみふかきゆへ、子孫の繁盛相統す。

日本六十余州に、弓矢をとつて藤原と名のる家、おそらくは秀郷の後胤たらぬはなかるべし。いかめしかりしためし也。

流布本系の下巻末尾の本文は、女人の化身である「竜神」の再確認、三井寺の「御めぐみ」、さらには、弓箭をよくすることにより武門を称揚される俵藤太一族の繫栄を語り、上巻の冒頭に照応するものとなっている。一方、「國大本」は、将門討伐に遅参し、それにより恩賞を受けることなく、悪霊化した藤原忠文が離宮明神として祀られたこと、小野宮実頼一族の没落と、藤原師輔一族が繫栄したことを語り、上巻冒頭の本文と照応することなく終焉している。「國大本」と流布本とは、それぞれ異なる「俵藤太物語」を志向して展開しているといえる。

(二) 國學院大學図書館所蔵『俵藤太物語』（「國大本」）の本文と金戒光明寺所蔵『俵藤太草子』（「金戒本」）のそれとの相違について、「1校異」と「2錯簡」の視点から指摘したい。

1校異

本項では、仮名遣い、助詞の有無以外の主な校異について確認する。

①「國大本」上巻冒頭三行目と「金戒本」上巻二／三行目

國大本 江州勢多の橋におほいなる大蛇はひかゝり侍り

金戒本 江州勢多の橋に……大蛇はひかゝり侍り

②「國大本」上巻第五回一行目と「金戒本」上巻第五回一行目

國大本 其後 卷絹 鎧・二領かしらゆひたる俵二つ 赤銅

金戒本 其後、卷絹、鎧甲……かしら結・たる俵二つ、赤銅

③「國大本」中卷第三回十一行目と「金戒本」下卷十二行目

國大本 凶徒うちまけて・・・・・・・・・・・・・・・・馬は風飛のあゆみを忘れ

金戒本 凶徒打・まけて、手を三ひやうに、まとはし、身を四方にのかし馬は風飛の歩・みを忘れ

④中巻冒頭に相当する本文（脱文）と下巻第二段一〜四行目

國大本 脱文（ナシ）

金戒本 程なく、家内に火をかけければ、煙はそらに立のほり、春の霞にたくへつ、猛火遙に燃あかり、さも

ゆ、しかりつる有様、一時のうちに、やきはらひ広野となりぬる、其跡をみる者、何も眼を、おとろか
しけり

これらの校異、脱文の原因が、「國大本」と「金戒本」に共通する祖本があり、その書写過程において生じたものか、それとも、「國大本」の制作過程で、「金戒本」を使用したものの、書写過程で誤写が生じたものかは不明である。

2 錯簡

①「國大本」中巻冒頭にある「凡秀郷の弓箭の勢漢の韓信陳平の御ことにも越たりむかしよりかたきをほろほして
將軍を蒙る人おほしといへとも或一代或二代なり此秀郷は子息の代に傳りて鎮守府の將軍かうを蒙る異國にはし
らす我朝にはかゝるためしなしいはんや末代にあるへしともおほえす弓箭とる身はたれもかくこそあらまほしけ
れと人々申あへりけり」の本文が、「金戒本」では、中巻第二段に位置している。

②「國大本」下巻冒頭に位置すると思量される本文が、「金戒本」下巻第二段として「程なく、家内に火をかけけれ
は煙はそらに立のほり、春の霞にたくへつ、猛火遙に燃あかり、さもゆ、しかりつる有様、一時のうちに、や
きはらひ、広野となりぬる、其跡をみる者、何も眼を、おとろかしけり」とある。

③「國大本」中巻第四図後に位置する「大將軍は下野の押領司藤原秀郷常陸大掾貞盛なりけるか同二月八日にかさねて公卿僉義ありて宇治民部卿藤原忠文副將軍の官旨を蒙りて舎弟刑部大輔仲舒もともに下向せられける彼卿は白河宰相五代の末參議季良か男なり駿河國富士の麓野浮嶋原を前に當て清見関に宿して侍りけるにあまのいさり火をみえて折節こゝろすみけるに清原滋藤といふ人をもともなへりけるか滋藤 漁舟火影冷焼波驛路鈴聲夜過山といふからうたを詠したりけるに將軍なみたをそなかし給ひける」が、「金戒本」では、下巻第三段にあたる。「國大本」も、当該本文中にある「二月八日」の日付けから、「金戒本」と同じく、中巻第四図の前に配されるべきかと思量される。

これらの錯簡の原因が、「國大本」の制作過程にあるのか、それとも、もともとの祖本が歴史的時間に基づいているのではなく、時に回想的に、時間を遡及する表現方法を採用していたのか、特定することは難しい。

國學院大學図書館所蔵『依藤太物語』の本文の特徴は、古本系「金戒本」の摸本としてあるものの、錯簡箇所から新たな時間軸を志向する物語となつているともいえる。

二、國學院大學図書館所蔵『依藤太物語』の挿絵の構図

國學院大學図書館に所蔵されている『依藤太物語』の挿絵の構図の特徴について、当該図に相当する本文を掲げ、とくに物語絵巻の異時同図法の表現の分析を通して確認したい。

(一) 上巻の挿絵の構図

図1は、一二四種の長大図で、藤原秀郷が勢多の橋で大蛇の背中を激しく踏みつけ悠然と通り過ぎた場面である。

本文「こゝに藤原秀郷といふものありけるか此由を聞てやすからぬ事なりとて身をやつし旅人の姿に出立てあみ笠といふものを着しつゝ、弓箭はかりを持只一人橋のかたへ来りつゝ、此ありさまを見て少もは、からす大蛇の背の上をあら、かにふみてしつかにそ通りける」に相当する。左画面に勢多の橋の中央で平然と大蛇を踏みつける秀郷、右画面には、秀郷の行動を見物する者たちが描かれている。中央に逃げ惑う男、次に馬上で弓矢を持つ武士、さらに市女笠の姿の女性、右端には稚児が配されている。

図2は、一〇九糶の長大図で、異時同図法を用いて、三場面(①・②・③)が展開している。①は、大蛇に化身していた老翁が藤原秀郷に蜈蚣退治を依頼する場面である。本文「かくて其後いつくともしらす白髪なる老翁一人出来り秀郷にむかひていわく我は是此勢多の橋の下に往事すてに二千餘歳なり我おほくの貴賤をはかりみるに御邊ほとかうなる人あるまし我にとしころ地をあらそふ敵ありて合戦度々に及といへとも身ふせうにして終にその本意をとけす鬼界高麗或震旦国までも身を化して相頼むへき人を尋けれども汝のことくなる無双武藝の武士いまたみすねかわくは我にたのまれて彼かたきを伐てたへかし」に相当する。②は、秀郷が老翁に導かれて深山に入る場面である。本文「老翁立て則秀郷にちかつき相つれて行けるに誠に鳥もかけりかたき深山なれはまして人跡絶万仞の峯にのほり千尋のふかき谷に下り行ほとに碧石そはたちける」に相当する。③は、秀郷が渚に立って、蜈蚣を討たんと弓矢を番えた場面である。本文「渚にたちて侍けるか雲海泥々として泪天に日暮煙波漫々としてまことに心ほそしとも云はかりなし然れとも弓箭をこゝろに頼つゝ、いまや〜とそ侍居たりける」に相当する。同一場面に秀郷が三度登場している様子が描かれている。画面右に①、画面中央に②、画面左に③が配されている。なお、左画面端に蜈蚣の蠢いている様が象徴的に描かれている。

図3は、八九糶の長大図で、秀郷が現れた蜈蚣を討たんと弓を番えた場面である。本文「去程に漸夜も更行夜半過

るほとにもなりしかは雨風一通り過て比良の高峯のかたより焼松二千ほど二行に燃せる物みえたりすはやこれそとおもひ五人張にせき弦かけて只しめし三年竹のふし近なるを十五束三つふせにこしらゑ鎌の中根を咎もとまてうちとをしにしたる矢只三筋を手にさみ矢ころちかくなりしかは件の五人はりに十五束三つふせうちつかひ忘る、ほとに引しほり」に相当する。右画面に矢をつがえる秀郷、中央画面に秀郷に相對峙するかのような蜈蚣、海中や雲中にも蜈蚣らしきものが描かれている。異時同図法により、蜈蚣の動いている様であるうか、不明である。

図4は、長さ凡そ九七糎の長大図で、秀郷が老翁に蜈蚣退治の顛末を語る場面である。本文「楮其後たちよりて是をみるに百足の蜈蚣にてそありける其時件の老翁出来りよるこふ事申す／＼とへていわんかたなし秀郷を請しさま／＼もてなしける事はいふはかりなし」に相当する。右画面に蜈蚣の蜈蚣、中央画面に山中で語り合う秀郷と老翁が描かれている。秀郷と老翁の顔の描写から、二人の喜ぶ表情が窺える。

図5は、凡そ一九四糎の長大図で、異時同図法を用いて、二画面(①・②)が展開している。①は、本文「瑠璃の沙たまのいした、みあた、かにしておのつからふん／＼たり朱樓紫殿玉のらんかんこかねを鎧にし銀を柱とし誠其粧ひ奇麗目にもみすましてみ、にも聞きし所なり彼老翁衣冠た、しく引つくるひ左右侍衛の官前後はるのよそほひいふはかりなくして秀郷をいねうかつかうは中／＼筆にもつくしかたきありさまなり」に相当する。②に相当する本文はない。①として右画面には、正装した老翁と秀郷、②として左画面には、龍女に欲待される秀郷が描かれている。また、本文「秀郷これそ音に聞龍宮城とおほえて行にひとつの樓門あり是をひらきてうちにいるに」に相当する図が右画面に描かれている。

図6は、凡そ一二九糎の長大図で、異時同図法を用いて、二場面(①・②)が展開している。①は、老翁が、秀郷に鎧二領、首を結ぶ俵二つ、赤胴の釣鐘を与えた場面である。本文「其後卷絹鎧二領かしらゆひたる俵二つ赤銅のつ

りかねひとつを秀郷にあたへていわく必御邊の門葉に將軍になる人おほかるへしとそしめしける秀郷も彼老翁にいとまこひたつの都をそ出にけるまことに秀郷の弓箭の道に天下にかたをならふるものなかりしもことはりとそ聞人ことにいわぬはなかりけり」に相当する。②は、秀郷が釣鐘とともに地上に戻る場面である。該当の本文はないが、上巻末尾の本文「秀郷は都へ歸りて此絹をきりつかふに更につくる事なし俵は納物をとれともこれ又つくる事なかりきさてこそそれより其名俵藤太とはいひけるとなりその俵は産業のたからなれはとてこれを倉廩におさめ鐘は梵硯の物なればとて江州三井寺へこれを奉るなり此鐘のこゑを聞輩は無明長夜の夢をおとろかし慈尊出世のあかつきをまつ末代ふしきの事ともなり」をふまえると、釣鐘は三井寺に寄進されたと分かる。また、秀郷の「俵藤太」といわれた由来も、ここで語られている。①として右画面に、老翁と秀郷、褒美として与えられた、鎧、俵、釣鐘が、②として左画面に雲に乗る秀郷と釣鐘が描かれている。

(二) 中巻の挿絵の構図

図1は、凡そ一〇〇糶の長大図で、秀郷一族の弓箭の腕前が賞讃されている場面である。本文「凡秀郷の弓箭の勢漢の韓信陳平の御ことにも越たりむかしよりかたきをほろほして將軍を蒙る人おほしといへとも或一代或二代なり此秀郷は子息の代に傳りて鎮守府の將軍かうを蒙る異國にはしらす我朝にはかゝるためしなしいはんや末代にあるへしともおほえす弓箭とる身はたれもかくこそあらまほしけれと人々申あへりけり」に相当する。中央画面に部屋からの射る武士を眺める秀郷(か)、庭には弓を引き残身した姿の武士、左画面に弓矢の的が描かれている。

図2は、凡そ一六六糶の長大図で、平将門が、都を置いた下野国相馬郡で除目を行っている場面である。本文「我はこれ天照太神三十八世の御末桓武天皇六代の孫なり十禪の主にそなわらんになにの、かりあるへき其上天照

太神正八幡大菩薩もいかてか百王の位にもらし給ふへきとて謀叛をおこして東八ヶ国をうちしたかへつ、天慶二年十一月十五日下野の国相馬の郡に都をたて平親王といわれ百官をはしめ除目を取りおこなひ八ヶ国の守に任ずる人々武蔵権守興世は上野守になる坂上近高は武蔵守に任し相馬の三郎まさつくは下野守同七郎まさふんは相模守厩別當田上経基は上総守藤原玄茂は常陸守同相馬与一正義は下野守同余次正衡は伊豫守にそなりにけり」に相当する。左画面奥に纏綱縁の畳に座る将門、左右に関東八か国の守、簀子の縁に五名、中央画面に守の従者や武士たち、右画面に、門の外で関東八か国の守を待つ御者と馬などが描かれている。長大図によって、政治力を誇示する将門像が表現されている。

図3は、凡そ一二一種の長大図で、将門が、将門追捕の命を受けた秀郷に酒をすすめている場面である。本文「汝は是本朝無双の兵何かゆへに今爰に來り給ふ秀郷答ていわく我日來は王位に恐れ一旦勅命にしたかふといへとも汝まさに畧位たかくしかも勝負のいろをみす国の主たらん事案にうたかひなし於向後御方にして戦いたさんといふその時將門欣喜のあまりに酒をす、む時に土器を論す秀郷先のむへきを將門こゝろをあらはさしめんかために先將門に吞せて其後種々の契約をなして出られける」に相当する。左画面奥に將門、盃を手に行っているのが秀郷であろうか。二人が契約をする前の様を描いている。中央画面に將門の従者、右画面の門の外には秀郷の従者と馬とが描かれている。図4は、一八〇種の長大図で、異時同図法を用いて、三場面(①・②・③)が展開している。①は、秀郷・貞盛軍が、將門軍と下野国相馬の郡で合戦をした場面である。本文「同十四日^{庚子}秀郷貞盛以下の軍兵下野の国相馬の郡にして將門と合戦た、かひにいのちをおします時をうつす秀郷貞盛身命をすて万死にいり一生にいて、た、かひけるか未時に矢合して散々に戦官兵凶徒にうち反されて死する者八十餘人疵を蒙る者その数をしらす」に相当する。右画面に、秀郷・貞盛軍と將門軍とが入り乱れて合戦している様が描かれている。②は、その合戦が時とともに展開してい

る様を描いている。③は、さらに戦いが進み、秀郷の子息千常が秀郷の残した矢で、将門の乗る馬の額を射るものの、将門が少しも動じることなく、目を見開いて立っていた場面である。本文「将門は李老か術をうしなひ今を限りと思ひ門にうち出る所に秀郷か子息千常父のいのこせる矢をとり将門か馬の額を射わり尾の下へ射出し次の箭にくひのほねをそいたりけるしかれとも将門馬も少もさはかす眼を見ひらきてそ立たりける」に相当する。左画面に矢を射かけられた将門の邸の門、門の外で騎乗し矢を番える将門、その右側に秀郷、貞盛の軍勢が描かれている。

図5は、一三七糧の長大図で、清原滋藤が駿河国清見が関で漁火を見て漢詩を詠じた場面である。本文「同二月八日にかさねて公卿僉義ありて宇治民部卿藤原忠文副將軍の宣旨を蒙りて舍弟刑部大輔仲舒もともに下向せられける彼卿は白河宰相五代の末参議季良か男なり駿河国富士の麓野浮嶋原を前に當て清見関に宿して侍りけるにあまのいさり火をみえて折節こゝろすみけるに清原滋藤といふ人をもとまへりけるか滋藤 漁舟火影冷焼波驛路鈴聲夜過山」といふからうたを詠したりけるに將軍なみたをそなかし給ひける」に相当する。右画面に、厩舎、魚を料理する従者、櫃を担ぐ者たち、邸には宿泊している副將軍藤原忠文ら一行、濡れ縁に漢詩を詠じる清原滋藤、左画面に漁火を焚く二艘の舟、左画面端に富士山が描かれている。

図6は、一二一糧の長大図で、秀郷・貞盛軍が将門らの首を持って清見が関を越えた場面である。本文「去程に秀郷貞盛は終に凶徒の軍にうちかつて将門か首其外同舎弟か首とも持せてさゝめかいて上りけるほどに駿河国清見が関にて行逢それより前後の大將うちつれて上洛す」に相当する。右画面上部に、勅命を蒙り下向する宇治民部卿藤原忠文副將軍ら、その手前には、帰京する秀郷・貞盛軍の負傷した武士たち、左画面に、将門らの首を持って清見が関を越える秀郷・貞盛軍が描かれている。戦に遅参した忠文一行と、戦を終えた秀郷・貞盛軍とが行合う様が、清見が関を境にして描かれている。

(三) 下巻の挿絵の構図

図1は、九五糧の長大図で、将門の邸が猛火に包まれた場面である。当該本文は、「國大本」にはない。参考のため金戒光明寺所蔵本によると、「程なく、家内に火をかけければ、煙はそらに立のほり、春の霞にたくへつ、、猛火遙に燃あかり、さもゆゝしかりつる有様、一時のうち、やきはらひ、広野となりぬる、其跡をみる者、何も眼を、おとろかしけり」に相当する。右画面に猛火に包まれた将門邸、中央画面に邸内で腹から血を吹き出す武士、左画面に逃げ惑う親子、武士たちの様が描かれている。

図2は、凡そ二三六糧の本絵巻最大の長大図で、異時同図法を用いて、二場面(①・②)が展開している。①は、秀郷が将門の首をかかげて都の大路を渡る場面である。本文「四月廿五日に将門か首都につき大路を渡りて獄門の木にかけらるあわれなる哉昨日は東夷の親王とかしつかれしかとも正しく王位をすむきし天運よとみな人ことにいひあけりけり」に相当する。②は、秀郷らが将門討伐の勝利を談合している場面か。該当する本文は不明である。

図3は、秀郷らが恩賞の除目を蒙る場面である。本文「同御宇天慶二年三月九日[△]けんしやうおこなはる藤原秀郷正四位下に叙して武藏と上野両国の守に任し鎮守府の將軍をけんして敵きりたいらけ永く子孫に傳りて子息千常従五位下に叙して下野守に任す後張良か書を授てたちところに師傳にのほる偏に弓箭の藝もかくやとぞ覚ける平貞盛は上平太なりける従五位上に叙して陸奥国に任し宇治民部卿忠文は副將軍なりしかとも下向なき以前に将門うたれければ道より帰りけりこれも同恩賞蒙るへきよし申けるに小野宮殿一座にてうたかはしきをおこなはされと云文ありとて捨られける」に相当する。左画面に紫宸殿で秀郷らへの報償を評定する公卿、階のもとに左右に武者、右画面には楼門外に秀郷と子息千常が乗ってきた馬、中門に向かう正装した二人の様が描かれている。

図4は、凡そ九五糧の長大図で、悪霊となった宇治民部忠文が離宮明神に祀られている場面である。本文「かくて

副將軍宇治民部忠文は終に勸賞蒙らざりけれども九條殿御詞を畏内裏を罷出けるか大地も響大山もくつる、計の音聲を以て口惜事なり同勅命を蒙て同朝敵を亡かし一人は賞にあつかり一人は恩にもる、小野宮殿の御はからひ生々世々不可忘家門をなかくうしなはんと匂り左右の手をにきり給へは八の爪手の中に通り血なれ出ければ各肝魂をけし給ひけるか宿所に帰り一夜かうちに白鬚となりて終日食事をとめ終にうせにき悪霊となりさま／＼おそろしき事とも多かりけり則神にいわ、れ給ひて宇治におはします離宮明神これなりいかなる事にや祭の日はわらわへのおほくあつまつり侍る」に相当する。画面中央に離宮明神、祭りの日であろうか、お参りする稚児たち、中に横笛を吹く幼子の様も描かれている。

三、國學院大學圖書館所藏『俵藤太物語』の文学的趣向

國學院大學圖書館所藏『俵藤太物語』の文学的趣向及び忠文の伝承について、次の卷末の表現をもとに、確認したい。かくて副將軍宇治民部忠文は終に勸賞蒙らざりけれども九條殿御詞を畏内裏を罷出けるか大地も響大山もくつる、計の音聲を以て口惜事なり同勅命を蒙て同朝敵を亡かし一人は賞にあつかり一人は恩にもる、小野宮殿の御はからひ生々世々不可忘家門をなかくうしなはんと匂り左右の手をにきり給へは八の爪手の中に通り血なれ出ければ各肝魂をけし給ひけるか宿所に帰り一夜かうちに白鬚となりて終日食事をとめ終にうせにき悪霊となりさま／＼おそろしき事とも多かりけり則神にいわ、れ給ひて宇治におはします離宮明神これなりいかなる事にや祭の日はわらわへのおほくあつまつり侍るとそれより小野宮殿の子孫絶はて、九條殿は一言の情に依て摂政関白今にたえさせ給はず

副將軍宇治民部忠文は、將門討伐になんら貢献しなかつたことにより、恩賞を蒙ることができなかつた。失意の忠

文は、憤怒の態をとった拳句に死に至り、最後には悪霊となったとある。語りおさめは、忠文が離宮明神として祀られ、小野宮一族は滅亡し、九条殿一族が摂政関白にまで昇りつめ繁栄したというものであった。

では、「國大本」『依藤太物語』の文学的趣向は奈辺にあるのか。依藤太の武門の賞讃ではなく、物語は、悪霊となった忠文が離宮明神として祀られたことを語り、最後に九条家の称揚を語り、終焉するのはなぜであろうか。

まず、典拠の一つと思量される『古事談』の藤原忠文の伝承について確認する。

忠文卿勸賞の沙汰の時、左大臣定め申されて云はく、「疑はしきをば質すこと勿かれ」と云々。右大臣申されて云はく、「刑の疑はしきをば質すこと勿かれ。賞の疑はしきをば許せ」とこそ候へ」と申されけれども、左府の申す詞を用ゐらるるに依り、遂に其の沙汰無し、と云々。忠文、此の事を畏み申すに依り、後日、富家の券契を九条殿に奉る、と云々。小野宮殿をば、怨心を結び子孫を失はむと誓ひ、永く霊と成る、と云々。

(巻四 三九三―四頁)

次に、『源平盛衰記』(巻第廿三)⁽⁹⁾の藤原忠文の伝承について確認する。

爰ニ忠文大悪心ヲ起シテ、面目ナク内裏ヲ罷出ケルガ、天モ響キ地モ崩ル、計ノ大音声ヲ放云ケルハ、「口惜事也。同勅命ヲ蒙テ同朝敵を平グ、一人ハ賞ニ預リ一人ハ恩ニ漏ル。小野宮殿ノ御計、生々世々不可忘。サレバ家門衰弊シ給テ、其末葉タラン人ハ、ナガク九条殿ノ御子孫ノ奴婢ト成給フベシ」トテ高ク匄り、手ヲハタト打テ拳ヲ把リタリケレバ、左右ノ八ノ爪手ノ甲ニ通り、血流レ出ケレバ紅ノ絞リタルガ如シ。ヤガテ宿所ニ帰り、飲食ヲ断、思死ニ失ニケリ。悪霊ト成テ様々ヲソロシキ事共有ケレバ、怨霊ヲ宥申^{なだめ}ベシトテ、忠文ヲ神ト祝奉。宇治ニ離宮明神ト申ハ是也。誠ニ其恨ノ通りケルニヤ、小野宮殿ノ御子孫ハ絶給ヘルガ如シ。タマ〜マシマス人モ、必皆九条殿ノ奴婢トゾ成給ヘル。九条殿ハ一言ノ情ニ依テ、摂政関白今ニ絶サセ給ハズ。(一四〇頁)

『古事談』と『源平盛衰記』との成立過程について言及することは避けたい。ただ、忠文の憤怒の様として語られる「國大本」の「家門をなかくうしなはんと鬪り左右の手をにきり給へは八の爪手の中に通り血なかれ出けれ」と、『源平盛衰記』の「家門衰蔽シ給テ、其末葉タラン人ハ、ナガク九条殿ノ御子孫ノ奴婢ト成給フベシ」トテ高ク鬪リ、手ヲハタト打テ拳ヲ把リタリケレバ、左右ノ八ノ爪手ノ甲ニ通り、血流レ出ケレバ紅ノ絞リタルガ如シ。」との叙述とを比較すると、「國大本」が『源平盛衰記』を基としている蓋然性は高い。しかし、「國大本」の「いかなる事にや祭の日はわらわへのおほくあつまり侍るとそ」に該当するものは、『源平盛衰記』にはない。ここにこそ、「國大本」の本文の特徴があるのではないか。

ここで、國學院大學図書館に所蔵されている『かくれ里』^⑩の本文をふまえて、「國大本」『倭藤太物語』の文学的趣向について述べておきたい。『かくれ里』は、次のようにはじまる。

秋のたそがれときはいと、心ほそかりしにいつとなく風ものすこくてお花ふきまねおりふしかれく／＼に聞ゆむしのかゑく／＼もいとあはれにき、なし名におふこよひは新月のいろまとかにてらして二千里のほかまてくまもなし古人の心もきかまほしと思ふよりえもきかとほそを立出そこともしらすたとり行ほとにみやこのひかしかも川にさしか、りみつのなかれいとふかきをこしなかまてまくりあけてさ夜ことに音をのみなく千鳥あしになりやうく／＼うちわたりてみなみをさしてゆくほとにかの大佛や三十三間をゆん手にみなし一二のはしやほうしやうしもみちいろこきいなり山松にか、れるふちのもりこわたの野辺に出にけり。

翁は、中秋の名月に、三十三間堂、法性寺、稲荷山を経て、「こわたの野辺」にたどり着いた。後の展開によれば、ここが鼠の住む「隠れ里」であった。

また、この『かくれ里』下巻末尾には、次のようにある。

さて和乎のことなればほていくわしやうそれかしのしゆくしよへ御いりあれとてえひす大こくもるともにてうとみのこうちほてや町にしやうしたてまつり御さかつきをそいたされけるめくれや／＼さかつきの千世もかはらぬときは木のえたもさかゆるわかみとりひさしき世までもはひこりてさかへん事こそうれしけれどて哥ひあそひ給ふいさやむかしをおもひてのすまひをはしめ申さんとてえひすとはきやうしにて大こくほてい立あかりとり給ふ

祝儀性を背景とした宴席が始まり、大黒天軍と恵比須軍の和解を経て、恵比須が行司となり、大黒天と布袋とが相撲をとる。気がつく、「御こゑみ、のあたりにと、まりてねさめのとこにまくらをあげつら／＼これらをおもふにくわうりやうか一炊さうしかこてう五十年も百年もうしのよたれのはてもなく松のはのちりうせすつきぬ御代こそめでたけれ」と、すべて夢であつたと展開し、「めでたけれ」と物語は終焉するのである。

「國大本」「かくれ里」は、江戸時代前期に制作されたと思量される大型の奈良絵巻である。『かくれ里』は近世の文化的所産でもあり、近世の文学的趣向を指示する物語であつた。

「こわたの野辺」は都との境にあり、物語が、伝承文学が、説話が生成する場でもあつた。^①

「國大本」「俵藤太物語」下巻末尾において悪霊化した忠文が「離宮明神」として祀られていることが語られているのは、「國大本」に祝儀性及び悪霊の魂を鎮める「鎮魂の物語」としての文学的趣向が醸成しているからではないだろうか。

註

(1) 『室町時代物語大成 第九』「俵藤太草子 金戒光明寺蔵」の解題において、「本書の中巻と下巻は、錯簡が甚しい。そこで、

順序を正して、詞書と絵とを配列し直したが、もとの順序がわかるように、詞書一段、画図一面ごとに、もとの位置を付記しておいた。本書は、次に掲出した版本の「俵藤太物語」と較べると、内容が遥かに簡素である。版本などの流布本は、本書のような古絵巻を参考に、大幅な増補を企てたものであろうか。本作の古い絵巻には、別に梅津次郎が「国華」の二八六号に紹介された、徳川達孝氏の蔵本がある。本書とは、また少しく異なっているようである。ほかに、この金戒光明寺本の系統の伝本は見えていない。(一三三頁 角川書店 昭和五十六年二月)とある。また、大島由紀夫氏も、松本隆信氏の成果〔増訂室町時代物語類現存本簡明目録〕・「御伽草子の世界」三省堂 昭和五十七年八月)をふまえて、「俵藤太物語」の諸本は二系統に分けられる。松本隆信氏の分類に基本的に従い、それを若干補正して示すと次のようになる。

A

○金戒光明寺蔵・「室町」絵巻大三軸

○金刀比羅宮蔵・「金戒光明寺本の模写」絵巻大一軸

B

(イ) ○寛永頃刊絵入大本二巻

○寛文九年刊絵入大本二巻(寛永頃刊絵入り本の後印本)

○学習院大学日本語日本文学科研究室蔵・「寛文頃」絵巻大三軸(下巻に錯簡あり)

○唐沢山神社蔵・「寛文頃」絵巻大三軸(書名を「三井寺物語」(箱書き)として伝えている。)

○東京大学国文学研究室蔵・奈良絵本特大三冊

○広島大学国文学研究室蔵・奈良絵本横三冊

○中野荘次氏旧蔵大谷女子大学図書館蔵・絵巻三軸

○フオグ美術館蔵・絵巻大三軸

○チェスター・ビーター・ライブラリー蔵・絵巻大三軸

(ロ) ○寛永頃刊絵入本の復刻修印本二冊(上巻四丁分修正)

(ハ) ○大東急記念文庫蔵・絵巻下巻欠大二軸

* ○旧徳川家蔵・「南北朝」絵巻一軸

A系はB系よりも叙述が簡略で、B系諸本が江戸初期以降の制作であるのに対し、その年代も古い。A系の金戒光明寺本は『御伽草子絵巻』『室町時代物語大成九』（錯簡を正して）に翻刻されており、また絵のみ『日本風俗史講座』に載せられている。金刀比羅宮本は金戒光明寺本の絵のみを天保年間に模写したものである。「お伽草子『依藤太物語』の本文成立」（『伝承文学研究 第三十一号』昭和六十年五月）と論究されている。本論では、A系を「古本系」、B系を「流布本系」と称することとする。

(2) 金戒光明寺蔵『依藤太草子』の翻刻は、前掲(注1)書『室町時代物語大成 九』にある。本論での「金戒本」の本文も、これによる。

(3) チェスター・ビートイ・ライブラリイ(CB)蔵『依藤太物語』の翻刻は、『甦る絵巻・絵本 チェスター・ビートイ・ライブラリイ所蔵 依藤太物語絵巻』(二〇〇六年十月 勉誠出版)にある。大島由紀夫氏の本文解説に加えて、小林祥次郎氏(歴史上の藤原秀郷)、真弓常忠氏(蛇と百足の民俗学)の解説が付されている。大島氏は、古本系の生成過程及び物語の志向について、「古本系は、『太平記』・『源平盛衰記』の中で主題と関係する箇所を切り貼りし、その切り貼り部分を通りやすいようにつないで成り立っている。そのため、依拠した先行作品の叙述から脱しきれず、依藤太を主人公とする物語は未成熟であった。」(一三四頁)と指摘されている。また、真弓氏は、「田原藤太秀郷と申す者が、勢多の橋を渡るとき跨いで通った蛇の頼みで、三上山の百足を退治した橋は『太平記』巻十五その他によつて広く知られています。この手柄で藤太秀郷は下野国の押領使に任ぜられたともいい、秀郷流の家系は近江にも下野にもあり、蒲生を名のつて歴史に名をとどめています(蒲生秀郷)。家系の方は蒲生氏が後に付合した疑いが濃厚ですが、少なくとも近江から発して東国にまで分布している田原藤太百足退治の説話は、背後に一つの文化を想定することができます。(略)田原藤太の百足退治の説話と相類したものは「日光山縁起があります。」(一四〇頁)と、「田原藤太物語」と「日光山縁起」との関係が指摘されている。

(4) 学習院大学日本語日本文学科学研究室蔵『依藤太物語』の本文は、『室町時代物語集 下』(新日本古典文学大系55 一九九二年四月 岩波書店)による。

(5) 寛永頃刊絵入本『依藤太物語』の本文は、『御伽草子集』(新潮日本古典集成 昭和五五年三月)による。

(6) 栃木県立博物館蔵『たはら藤太絵まき物』三軸の翻刻は、山本晶子氏、見田僚子氏によるものがある(『学苑 昭和女子大学 近代文化研究所』六五〇・六五一号 平成六年二月・三月)。また、栃木県立博物館蔵『たはらとうた』三冊も両氏

による翻刻がなされている（学苑 昭和女子大学 近代文化研究所）六五六・六五九・六六二号 平成六年九月・十一月・平成七年一月）。

- (7) 近年、確認された『俵藤太物語』については、出口久徳氏により、「また、近年、『俵藤太物語』の新たな伝本が報告されている。栃木県立博物館蔵絵巻三軸（『学苑 昭和女子大学 近代文化研究所』六五〇・六五一号、一九九四年二月、三月）、友山文庫蔵絵巻三軸（国文学研究資料館マイクロ資料）、群馬県立歴史博物館蔵絵巻五軸・同博物館蔵絵巻三軸（後掲書には部分）・栃木県立博物館蔵絵巻本三冊（後掲書には部分）（『伝説の将軍 藤原秀郷 武者と物怪の物語』）、石川透氏蔵絵巻（部分）が『週刊朝日百科世界の文学』二九日本一御伽草子 二〇〇〇年二月に掲載）などがある。こうした新たに知られるようになったテキストも含めた分類整理、他のお伽草子との比較、テキスト制作の目的など、今後さらに多様な視点をふまえて検討する必要がある。」（国文学研究資料館、チェスター・ビーティー・ライブラリー編『チェスター・ビーティー・ライブラリー 絵巻絵本解題目録 解題篇』二〇〇二年三月 勉誠出版）と言及されている。

(8) 『古事談』の本文は、『古事談 続古事談』（新日本古典文学大系41 二〇〇五年十一月 岩波書店）による。

(9) 『源平盛衰記』の本文は、美濃部重克氏、松尾葦江氏校注『源平盛衰記（四）』（平成六年十月 三井弥書店）による。

(10) 國學院大學図書館所蔵の『かくれ里』の全文を翻刻し、本文の特徴について報告した（針本正行・山本岳史「國學院大學図書館所蔵『かくれ里』の翻刻と解題」〔國學院大學 校史・学術資産研究 第七号〕國學院大學研究開発推進機構 國學院大學 校史・学術資産研究センター 平成二七年三月）。

(11) 宇治の祭礼と芸能との文化的関係、藤原忠文と「またふり神社」（離宮明神）との文化的背景については、先学のご論がある。前者については、林屋辰三郎氏「宇治離宮祭について」（『中世芸能史の研究』三二七―三四二頁 一九六〇年六月 岩波書店）及び内田みや子氏「宇治大幣神事と縣祭の祭祀組織」（『京都民俗』第二十八号 平成二十三年三月）がある。後者については、上田さち子氏が「またふり神社」の祭神は天慶の乱で恩賞に漏れて恨みをのんで死んだ藤原忠文（八七三―九四七）で、恩賞を定めた藤原実頼の子女に崇つたので世に悪霊民部卿とよばれた人物である。宇治に別業（別邸）を持っていたため宇治民部卿の名があったが、今では居住地さえ忘れ去られたままである。それが何故悪霊として祀られてきたのか。それは忠文がこの地域に発生した怨霊の一つとされたからだと私は考える。（略）宇治では、怨霊が、御霊信仰の本来の猖獗期である中世に、名乗りをあげて災いをもたらした形跡はない。むしろ離宮明神に中世の御霊信仰的な風流が見られる。」

〔祓と宇治―地域と穢・祓・神祇〕『修験と念仏 平凡社選書二二三』二九七―八頁 平凡社（二〇〇五年九月）と論究されている。また、流布本をもとに、野口実氏が、歴史上の藤原秀郷と説話の世界の「俵藤太」との関係について、『俵藤太物語』は、あくまでも説話・伝承をベースに娯楽を目的に書かれた物語文学ではあるが、所々に個別的な形で必要以上に正確な歴史的事実が組み込まれていることに気が付く。たとえば、むかでを退治した秀郷にたいして龍神が謝恩として鎧と太刀を与え、『この鎧を召し、この剣を持つて、朝敵を滅ぼし、將軍に任じ給うべし』と言っているにもかかわらず、最終的に秀郷本人は將軍になったとは述べず、従四位下武藏守・下野守と記す。これは明らかに『扶桑略記』の記事に基づいており、上巻冒頭の秀郷の系譜に関する記述とともに、この物語の作者がこのような史料を参照し得る立場にあったことを示す。また、中巻には秀郷の子千常も登場しているが、これらのことは、この物語の作られた時代の鎮守府將軍家としての秀郷流藤原氏にたいする関心の高まりを反映するものであろう。」と論究されている（「八 俵藤太説話の形成」〔2 俵藤太秀郷の造形〕『伝説の將軍 藤原秀郷』一四〇―一五二頁 平成十三年十二月 吉川弘文館）。

* 國學院大學図書館蔵の古典籍の閲覧・調査にあたっては、古山主幹に多大なご配慮をいただいた。ここに御礼申し上げます。

それ人王六十一代の帝朱雀院の御宇にあたり
承平二壬辰歳神無月廿日あまりの事なるに

江州勢多の橋におほいなる大蛇はひかゝり侍り
ければ往來の貴賤きも魂をうしなひたやすく

橋を過るものなかりければ万民の愁をなし只橋の
かなたこなたに立煩はうせんとしてそ居たり

けるこゝに藤原秀郷といふものありけるか此由を
聞てやすからぬ事なりとて身をやつし旅人の

姿に出立てあみ笠といふものを着しつゝ、
弓箭ばかりを持只一人橋のかたへ来りつゝ、

此ありさまを見て少もは、からす大蛇の背の
上をあらゝかにふみてしつかにそ通りけるその時

みる人ことに肝をけしあきれはて、そ居たりける
大蛇も少もはたらかすしてそのまゝ、うせに

ければ諸人安堵のおもひをなし其後たや

すく橋をそわたしける

上巻第一回 秀郷、勢多の橋で大蛇の背を踏みつける

かくて其後いつくともしらす白髪なる老翁一人

出来り秀郷にむかひていわく我は是此勢多の
橋の下に往事すてに二千餘歳なり我おほくの

貴賤をはかりみるに御邊ほとかうなる人ある
まし我にとしころ地をあらそふ敵ありて合戦

度々に及といへとも身ふせうにして終にその
本意をとけす鬼界高麗或震旦國までも

身を化して相頼むへき人を尋けれども汝の
ことくなる無双武藝の武士いまたみすねかわくは

我にたのまれて彼かたきを伐てたへかしといへは
秀郷こたへていわく何よりそれこそ安き間の事

なれ征夷使軍監の家に生る、心は武畧を

さきとする事なればたとひかたきをうたん

事は得すとも命は汝にあたへてかはねを海中に

さらさん事は後世の名聞にあらずやさらは

彼所におもむかんといへは老翁立て則秀郷に

ちかつき相つれて行けるに誠に鳥もかけり

かたき深山なればまして人跡絶万仞の峯に

のほり千尋のふかき谷に下り行ほとに碧石

そはたちけるあら海の邊に來りぬ其時彼老翁

かたりていわく爰にてまち給ふへしかたきは大虵

なり深更に及びて風雨一通り過は必來るへし

我はまた小虵となりてかたきをおひき來るへし

かならずと云すて、翁もたちまちさりぬ秀郷た、

一人老翁のおしへのことく渚にたちて侍けるか

雲海泥々として泪天に日暮煙波漫々として

まことに心ほそしとも云はかりなし然れとも

弓箭をこ、ろに頼つ、いまや／＼とそ侍居

たりける

上卷第二回 異時同回

①老翁、秀郷に百足退治を頼む

②秀郷、老翁に導かれて深山に入る

③秀郷、弓矢を番える

去程に漸夜も更行夜半過るほとにもなりし

かは雨風一通り過て比良の高峯のかたより

焼松二三千ほど二行に燃せる物みえたり

すはやこれそとおもひ五人張にせき弦かけて

只しめし三年竹のふし近なるを十五束三つ

ふせにこしらえ鎌の中根を筈もとまてうち

とをしにしたる矢只三筋を手はさみ矢ころ

ちかくなりしかは件の五人はりに十五束三つふせ

うちつかひ忘る、ほとに引しほり眉間の真中

をそいたりける其箭手答しくろかねなどをいる

やうに聞しか筈を返してぞ立さりける秀郷

一の箭を射損して亦二の箭を番て態と

前の矢坪をと心さしいたりけるに此箭もまた

前のことくにしておとり帰りてそた、さりける

秀郷二つの矢を射そんしつ頼所は此箭一筋

なりいか、はせんとおもひけるかきとあんし出し

たる事ありとて此度いんとしける矢さきに唾を

はきかけてまたおなし矢所をそいたりける此

矢に毒をぬりたるゆへにやよりけん此矢眉間の

真中をとおり喉の下迄はふくらせてそたち

たりけるか件の焼松も光忽にきえ嶋のことく

なる物のたをる、音大地をひ、かし太山も

くつる、やらんとそおほえける

上巻第三回 秀郷、百足に三筋目の矢を構える

偕其後たちよりて是をみるに百足の蜈

にてそありける其時件の老翁出来り

よろこふ事中くたとへていわんかたなし

秀郷を請しさまくもてなしける事は

いふはかりなし

上巻第四回 秀郷、百足退治を老翁に語る

秀郷これそ音に聞龍宮城とおほえて行に

ひとつの樓門あり是をひらきてうちにいるに

瑠璃の沙たまのいした、みあた、かにしておのつから

ふんくたり朱樓紫殿玉のらんかんこかねを

鑑にし銀を柱とし誠其粧ひ奇麗目にも

みすましてみ、にも聞さりし所なり彼老翁衣

冠た、しく引つくるひ左右侍衛の官前後

はるのよそほひいふはかりなくして秀郷をいねう

かつかうは中く筆にもつくしかたきありさまなり

上巻第五回 異時同回

①衣冠を正しくした老翁、龍宮城で秀郷を歓待する

②秀郷、龍女から歓待を受ける

其後卷絹鎧二領かしらゆひたる俵二つ赤銅

のつりかねひとつを秀郷にあたへていわく必御

邊の門葉に將軍になる人おほかるへしとぞしめしける秀郷も彼老翁にいとまこひたつの都をそ出にけるまことに秀郷の弓箭の道に天下にかたをならふるものなかりしもことほりとそ聞人ことにいわぬはなかりけり

上巻第六回 異時同回

- ① 龍王、秀郷に卷絹・鎧・俵・釣鐘を与える
② 秀郷、釣鐘とともに地上へ向かう

秀郷は都へ歸りて此絹をきりつかふに更につくる事なし俵は納物をとれともこれ又つくる事なかりきさてこそそれより其名依藤太とはいひけるとなりその俵は産業のたからなれはとてこれを倉廩におさめ鐘は梵砌の物なれはとて江州三井寺へこれを奉るなり此鐘のこゑを聞輩は無明長夜の夢をおとるかし慈尊出世のあかつきをまつ末代ふしきの

事ともなり

中巻

中巻第一回 秀郷一族の弓矢の腕前が披露される

凡秀郷の弓箭の勢漢の韓信陳平の御

ことにも越たりむかしよりかたきをほろほして

將軍を蒙る人おほしといへとも或一代

或二代なり此秀郷は子息の代に傳りて

鎮守府の將軍かうを蒙る事異國には

しらす我朝にはかゝるためしなしいはんや

末代にあるへしともおほえす弓箭とる

身はたれもかくこそあらまほしけれと人々

申あへりけり

貞盛は都にありけるか彼地に馳下り

合戦度々に及といへとも將門は白鬚とて

三尺かうちは弓箭太刀かたならぬ鎧を

着しつ、八方粟毛とて木すゑをつたひ

水のうへもはしる龍馬に乗戦けるに

凡夫の面をむかふへきやうもなかりければ

其本意をとけすとへは鷹の下のすゝめ

鼠のうへの油のことくにて都へ上りつゝ、

歳月をそをくりける将門情おもひける昔の

景帝天皇は五代王位をたもたせ給ひて

後位に即せ給ひき我はこれ天照太神

三十八世の御末桓武天皇六代の孫

なり十禪の主にそなわらんになにの

は、かりあるへき其上天照太神正八幡

大菩薩もいかてか百王の位にもらし給ふへき

とて謀叛をおこして東八ヶ國をうち

したかへつ、天慶二年十一月十五日下野の

國相馬の郡に都をたて平親王といわれ

百官をはしめ除目をとりおこなひ八ヶ國

の守に任する人々武蔵權守興世は上野守

になる坂上近高は武蔵守に任し

相馬の三郎まさつくは下野守同七郎

まさふんは相模守厩別當田上経基は

上総守藤原玄茂は常陸守同相馬与一

正義は下野守同余次正衡は伊豫守にそ

なりにけり

中卷第二回 将門、相馬の郡にて除目を行う

かくて此由都にきこえしかは同_{庚子}正月

十一日将門追伐の官符被下

大政官符下東海東山兩道諸國司應

援有殊功輩加不須賞事

右平将門積惡弥長宿暴暗成猥指烏合之

群只宗狼戾之事獨知井底之廣宣忘海

外之間開闢以來本朝之間叛逆之甚未有此

比者左大臣宣奉 勅宣仰國宰若敬魁帥

者募以來紫之品賜以田地之賞永及子孫傳之

不朽又斬次将者隨其勲功賜官爵者更承

知句違矣

天慶三歲^{庚子}正月十一日

從五位下右大夫尾張言鑿

右少弁正五位下内藏頭源朝臣相織奉

爰に秀郷思惟していわく我將門か躰をみんに

若大將軍の相ありて國家あやうかるへくは

直にいのちをすて、かれか命をうはふへし

もしさもあらずんは戦をいたさんとこゝろの

うちにちかひつ、則舍人一人相供して潜

將門か陣内にいたりてことのよしをいふ

將門けつる所の髪をいわず烏帽子引入

いそぎ出向ひて秀郷を請していわく汝は是

本朝無双の兵何かゆへに今爰に來り給ふ

秀郷答ていわく我日來は王位に恐れ一旦勅命

にしたかふといへとも汝まさに畧位たかくしかも

勝負のいろをみす國の主たらん事案に

うたかひなし於向後御方にして戦いた

さんといふその時將門歎喜のあまりに酒を

す、む時に土器を論す秀郷先のむへきを

將門こゝろをあらはさしめんかために先將門に

吞せて其後種々の契約をなして出られけるか

情將門を見るに其相かろくしてかたき粧

なし人君の躰にあらず偏に國土のほうそく也

合戦をいたして命をうははん事案の内

なりとて直に勝負をせずして出られけり

中卷第三回 將門、秀郷の言葉に歎喜して酒をすすめる

同十四日^{庚戌}秀郷貞盛以下の軍兵下野の國

相馬の郡にして將門と合戦た、かひにいのちを

おします時をうつす秀郷貞盛身命をすて

万死にいり一生にいて、た、かひけるか未時に

矢合して散々に戦官兵凶徒にうち反されて

死する者八十餘人疵を蒙る者その数を

しらす貞盛秀郷等引退刻に將門

勝に乗て責た、かふ其時貞盛秀郷精兵を

すくり身骨をくたき反合て戦ければほとんどなく
 凶徒うちまけて馬は風飛のあゆみを忘れ
 将門は李老か術をうしなひ今を限りと思ひ
 門にうち出る所に秀郷か子息千常父のいのこ
 せる矢をとり将門か馬の額を射わり尾の下へ
 射出し次の箭にくひのほねをそいたりける
 しかれとも将門馬も少もさはかす眼を見ひら
 きてそ立たりける

中巻第四回 異時同回

- ① 秀郷・貞盛軍、相馬の郡で将門と合戦する
 ② 馬に乗った将門、目を見開きて立つ

大將軍は下野の押領司藤原秀郷常陸大掾
 貞盛なりけるか同二月八日にかさねて公卿
 僉義ありて宇治民部卿藤原忠文副將軍の
 宣旨を蒙りて舎弟刑部大輔仲舒もともに
 下向せられける彼卿は白河宰相五代の末參議

季良か男なり駿河國富士の麓野浮嶋
 原を前に當て清見関に宿して侍りけるに
 あまのいさり火をみて折節こゝろすみ
 けるに清原滋藤といふ人をもともなへり
 けるか滋藤
 漁舟火影冷焼波驛路鈴聲夜過山
 といふからうたを詠したりけるに將軍なみた
 をそなかし給ひける

中巻第五回 清原滋藤、漢詩を詠ず

去程に秀郷貞盛は終に凶徒の軍にうち
 かつて将門か首其外同舎弟か首とも持せて
 さゝめかいて上りけるほとに駿河國清見か関にて
 行逢それより前後の大將うちつれて上洛す
 貞盛秀郷には勸賞おこなはれその粧ひ
 いふはかりなし

中巻第六回 秀郷、将門らの首を持ち清見が関を越える

下巻

将門承平年中よりおほくの人をうしなひ

朝家のわつらひとなりぬれとも天慶三年二月

十四日秀郷かために誅せられにけりそのとし儘に

六七年なり昔入鹿大臣天下をかたふけしに

天智天皇三年六月十四日に大極殿にしに

鎌足入鹿をうち給ひて内大臣になり給ひき

これ内大臣のはしめなり

下巻第一回 将門の邸、猛火に包まれる

同四月廿五日に将門か首都につき大路を

渡りて獄門の木にかけらるあわれなる哉昨日は

東夷の親王とかしつかれしかとも正しく

王位をそむきし天運よとみな人ことにいひ

あへりけりそれより世おさまりて以来二百

七十七歳其間帝王二十三代臣又撰祿を

ふみて今の撰政まては九代なりされは秀郷

卿迄八代の後胤をうけていまた御てき

をほるほすにこそと人々申あへりけり

下巻第二回 異時同回

①将門の首、都の大路に着く

②秀郷ら、評定する(?)

同御宇天慶二年三月九日乙未けんしやう

おこなはる藤原秀郷正四位下に叙して武藏と

上野兩國の守に任し鎮守府の將軍を

けんして敵きりたいらけ永く子孫に

傳りて子息千常從五位下に叙して下野守に

任す後張良か書を授てたちとところに

師傳にのほる偏に弓箭の藝もかくやとそ

覚ける平貞盛は上平太なりけるか從五位上に

叙して陸奥守に任し宇治民部卿忠文は副

將軍なりしかとも下向なき以前に將門うたれ

ければ道より帰りけりこれも同恩賞蒙る

へきよし申けるに小野宮殿一座にてうたかはしき

をおこなはされと云文ありとて捨られけるを

九條殿次座にて刑のうたかはしと賞のうた

かはしきをはあたへよと云文をひかせ給ひけれとも

僉義につきてやみにき

下巻第三回 秀郷ら、恩賞を蒙る

かくて副將軍宇治民部忠文は終に勸賞

蒙らさりけれとも九條殿御詞を畏内裏を

罷出けるか大地も響大山もくつる、計の音

聲を以て口惜事なり同勅命を蒙て同朝

敵を亡かし一人は賞にあつかり一人は恩にもる、

小野宮殿の御はからひ生々世々不可忘家門を

なかくうしなはんと冑り左右の手をにきり

給へは八の爪手の中に通り血なかれ出ければ

各肝魂をけし給ひけるか宿所に帰り一夜か

うちに白鬚となりて終日食事をとめ終に

うせにき悪霊となりさま／＼おそろしき

事とも多かりけり

則神にいわ、れ給ひて宇治におはします

離宮明神これなりいかなる事にや祭の

日はわらわへのおほくあつまり侍るとそこれより

小野宮殿の子孫絶はて、九條殿は一言の

情に依て摂政関白今にたえさせ給はず

下巻第四回 忠文、悪霊となり離宮明神にまつられる